

ドコズンドコ！ 小林 <1>

関野 唯 (イラストも)

遠慮がちに灯され、そこには麻布で巻かれた泥つきネギ、発泡スチロールに入れた魚介類、十数種類の豆など多様な品が並べられる。そして一人、また一人と現れる人々。農家さんや鮮魚・豆製品等の卸商の方が店を出し、品物を買いに來る人の軽トラが集まっているのだ。こんな真夜中に人が!!

寝ぼけ眼の私は夢から覚めない思いでこの朝市の様子をただ見ていた。
4時過ぎになってあたりが明るくなり、いよいよ駅改札そばの小屋で、背負いかゴに野菜を詰めているおばあちゃんの姿があるではないか! そう、私が常磐線内でよく目撃したあのおばあちゃん、始発列車に乗って東京へ向かう行人商なのであった。

チヨさん(仮・70代)もその一人。20代半ばで嫁いできてから行商を続けておられるベテランである。小柄なお身体からは想像できないほど、パワフルなおばあちゃんであり、約60kgあるという品物を詰めたかゴを背負って週に4日は行商に出るといふ。

私は行商人の方に対してある素朴な疑問を抱いていた。
「おばあちゃん、なぜ車もあるのに、重い重い荷物を背負って自分の足で行商に向かうんですか?」

私の問いに、おばあちゃんは頬を緩ませてこう答えてくれた。「そりゃ楽しいからさ。行商をやってきた50年間は、あつという間だったよオ」

行商に対し「大変そうだな」というイメージを抱いていた私にとって、トメさんの一言は意外だった。しかしお話を伺うごとに、なぜおばあちゃんが重いかゴを背負ってまで自分の足で行商に出るのか、私にも少しずつ分かってきたように思ふ。

というわけで、これから数回にわたり、行商人の「エピソード」ともにおばあちゃんがイキキ語る行商の魅力に迫ってきたいと思ふ。

関野 唯(せきの ゆい)
千葉大学大学院。昨年4月から今年2月まで、学部学生8人の協働で、印西市のニュータウンの暮らしと里山とのつながりについて学んだ成果を「よかっぺ印西」というマンガの冊子にまとめた。これに続いて、小林駅前でも今も行われている朝市と、朝市で調達した食材を東京などに運んで販売する行商の女性たちを取材とした「ドコズンドコ小林」という冊子にまとめた。本紙では、関野さんの取材体験を6回にわたる連載でお伝えする。



JR常磐線や京成線のホームや車内で、風呂敷でくるんだ大きなかゴを抱えているおばあちゃんを目撃したことがあるだろうか。大学入学を機にJR常磐線を利用するようになった私は、度々かゴを背負ったおばあちゃんを見かけ、首をかしげていた。「あのおばあちゃん、重そうなかゴを背負って大変そう...でも、一体何者なの?」

と、この変わったJR小林駅南口広場、午前3時、真っ暗な空の下、街灯が

おばあちゃん、なぜ車もあるのに、重い重い荷物を背負って自分の足で行商に向かうんですか?

ドコズンドコ! 小林 <1>

関野 唯 (イラストも)